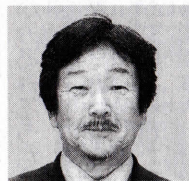


「古事記」編纂1300年

関連本出版相次ぐ

評・三浦 佑之



みうら・すけゆき
1946年三重県生まれ。古代文学研究者・立正大教授。著書に『口語訳 古事記』など。

大地の誕生から語り出される神々の物語と、高天の原から降りてきた神の子孫とされる天皇たちの事績とを伝える現存最古の歴史書、今年はその『古事記』が編纂1300年だということで、新聞各紙をはじめ学術誌も商業誌も工夫をこらした『古事記』特集を組んで賑わっている。ちょうど今、書店には創刊750号記念の『芸術新潮』6月号が並び、独特の切り口で『古事記』を紹介する。また7月下旬から11月上旬には、島根県が出雲市を中心に「神話博しま

道に引きもどされてはたまらない。『古事記』研究に携わる者としては気を抜けないが、そうさせないためにはきちんとした情報と知識を提供することが必要になる。『古事記』とはいかなる作品で、そのおもしろさをどう読みとればいいか。今までのように国家や天皇の側から読むのではなく、私たちの側から読むのがいい。好都合にも、節目の年にふさわしい本が出た。『ぼおるぺん古事記 一 天の巻』（平凡社、1000円）は、ほのぼのとしたタッチで広島と原爆そして戦争を鋭く描いた『夕風（ゆづり）の街 桜の国』や『この世界の片隅に』で知られる漫画家こうの史代が『古事記』に挑んだ意欲作。こうのと『古事記』との組み合わせが成功している。出たのは三巻のうちの第一巻で、スサノヲのワロチ退治神話までが収められる。登場するのは

神話絵物語や解釈・受容史

ね」という大イベントを予定し、宮崎県や奈良県も負けじと神話の国を宣伝する。

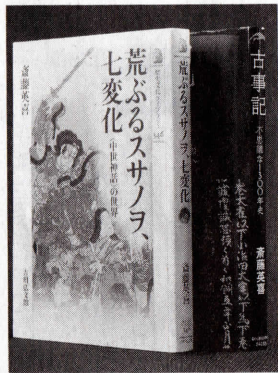
出版や観光を巻き込んで一大ムーブメントとなった『古事記』関連の事件といえは、1940年の「紀元二千六百年」を思い出す。時代が違つて笑われるかもしれないが、へんなかたちで『古事記』が利用され悪の

神々しくはないユーモラスな神たちで、じつにいいねいに、系譜も含めて『古事記』の神話を忠実に追っている。しかも筋をなぞるだけではなく、このの解釈が興味深い。たとえば章のタイトルには「なれりなれり」「そそきそそき」「すがすが」などオノマトペふうの重ねることが用いられるが、それだけで、こののが音や語りに耳を傾けながら『古事記』を読んでいることがわかるのだ。

神話を絵にするのはむずかしいと思うが、イザナギが妻を追って黄泉の国へ行く場面（スサノヲが、馬の皮を剥いで高天の原の機織り小屋に投げ込む場面）では、肉のほうではなく剥いだ皮だろうと突っ込みを入れながら読む。絵



『ぼおるぺん古事記 一 天の巻』の一場面 ©こうの史代／平凡社



『荒ぶるスサノヲ、七変化』(左)と『古事記 不思議な1300年史』

があるゆえに、具体的な場面を浮かべて読めるのが楽しい。

斎藤英喜の『古事記 不思議な1300年史』(新人物往来社、1400円)は、『古事記』がどのように受容されてきたかを論じた類書のない研究であり、成立にかかわる斬新な視点も提起される。私も712年成立の根拠となる序文は疑わしいと考えているが、斎藤は、平安時代に何度も行われた『日本書紀』の講書(学者が解釈し講義する場)において、そのサブテキストであった『古事記』の起源を説くために作られた神話が、序文ではないかと言う。

その後『古事記』は、中世の宗教家たちの手を経て、18世紀末に本居宣長によって表舞台へと引き出される。そうした古代から現代に至る『古事記』の受容史をわかりやすく理解できる貴重な本である。また同じ著者の『荒ぶるスサノヲ、七変化』(吉川弘文館、1700円)は、中世という混沌とした時代に、スサノヲという神がどのように語り変えられていったかを掘り下げている。神話の解釈は新しい神話の創造でもあったという中世への視点が刺激的だ。

敬語ばかりの現代語訳は敬遠しようとか、日本という語をくり返す入門書は避けたいほうがいいとか、『古事記』関連本への注文はいくつもある。しかし、このや斎藤の本を読むと、『古事記』研究は間違いない方向へ進んでいるということが確信できてほっとする。

◇この・ふみよー1968年広島市生まれ。漫画家。95年『街角花だより』でデビュー。◇さいとう・ひできー1955年東京都生まれ。佛教大教授。著書に『古事記 成長する神々』など。